

令和元年度 依存症民間団体支援事業報告

団体名 特定非営利活動法人いちごの会

事業名『依存症回復施設の役割・課題』明確化と多機関連携のための連続研修会

<活動内容の概要>

令和元年度厚労省依存症民間団体支援事業では、回復施設の役割・課題をより明らかにしていくことを目的とした研修事業に取り組みました。

まず初めに、地元地域の方々そして全国の関係団体や機関まで幅広く呼びかけ、回復施設の意義を啓発普及するために、「アルコール関連問題と回復施設の役割・課題」をテーマとした講演会を開催しました。

次に、「当事者の方や関係者と共に回復施設の現状と課題を考える、地域に根ざしたリカバリーサポートネットワーク連続研修会」を3シリーズ9回行いました。「依存症からの回復・生活・就労に係る回復施設の役割」について、それぞれ①自助グループにつながる生活リズムの獲得②地域での回復生活の充実と継続③就労支援をテーマに検討しました。「多機関連携」については①専門治療機関と回復施設②保健福祉行政機関や社協と回復施設と③地域から回復支援につなげるための生活保護・生活困窮と回復施設との連携を取り上げ検討しました。「リカバリー支援のサポートネットワーク」では①生活問題としての依存症の援助技術と介入②子どもに着目した支援③兵庫地域におけるリカバリーをめざすサポートネットワークづくりの視点から検討しました。

講演会「アルコール関連問題と回復施設の役割・課題」2019年9月16日東住吉区民ホール
講師 清水新二（奈良女子大学名誉教授 放送大学教授）（450名）

▶第1シリーズ「依存症からの回復・生活・就労における回復施設の役割を考える」

第1回 自助グループへつながる生活リズムの獲得へ向けた支援方法を考える（47名）
2019年11月29日（金）13：30～16：30 於）国際交流センター話題提供：自助グループ（AA
関西セントラルオフィス広報委員会・大阪市断酒連合会）いちごの会職員及び利用者

第2回 地域で回復生活を維持・充実していくための支援方法を考える（43名）

2019年11月29日（金）13：30～16：30 於）国際交流センター 話題提供：大阪マック・大阪
ダルク/フリーダム・釜ヶ崎ストロームの家/リカバリハウスいちご

第3回 就労支援を考える（44名）

2019年12月13日（金）13：30～16：30於）於）国際交流センター 話題提供：当事者・小谷
クリニック・大阪府こころの健康総合センター・新生会病院・ふれあい共生会

▶第2シリーズ「専門治療機関と関連支援機関と回復施設との連携を探る」in大阪

第4回 専門治療機関と回復施設との連携における現状と課題（32名）

2020年1月9日（金）13：30～16：30 於）国際交流センター 話題提供：小谷クリニック・
新生会病院・リカバリハウスいちご

第5回 関係者と共に考える保健福祉行政と回復施設との連携における現状と課題 (2020年1月30日 (木) 13:30~16:30 於) 国際交流センター 話題提供: 大阪市保健福祉センター精神保健福祉相談員 区社協職員

第6回 地域から回復支援につなげるために回復施設ができること「生活保護・生活困窮の現場と回復施設の連携」～地域に隠れている、地域で困っている依存症、支援のための新たな連携を考える～ (38名)

2020年1月31日 (金) 13:30~16:30 於) 国際交流センター 話題提供: 元生活保護担当職員・生活困窮者支援担当者職員

▶第3シリーズ 「リカバリー支援の新たなサポートネットワークづくり」 in兵庫

第7回「生活問題としての依存症～援助技術と介入の実践」 (43名)

2020年2月14日 (金) 13:30~16:30 於) アルカイクホール 話題提供) 西部智子 (弁護士) 生活保護担当職員 相談支援専門員 武輪真吾 (リカバリハウスいちご)

第8回「アディクション問題がある家庭への介入」子どもを支える関わりを考える (41名)

2020年2月21日 (金) 13:45~16:45 於) アルカイクホール 話題提供) 内田扶喜子 (尼崎市子ども政策課) 佐古恵利子 (リカバリハウスいちご) 田坂哲子 (尼崎市保健所健康増進課) 藤井愛 (子どもの育ち支援センター「いくしあ」家庭児童相談課)

第9回「リカバリーをめざすサポートネットワークづくり」 (40名)

2020年2月28日 (金) 18:30~20:45 於) アルカイクホール 話題提供: 宮本晃子 (尼崎市保健所疾病対策課) 小林正英 (兵庫県立ひょうごこころの医療センター) 井上豊 (尼崎市断酒会) 兼松孝輔 (リカバリハウスいちご) 生活保護担当職員 (西宮市)

<事業の成果>

講演を通じて、医療保健福祉関係者・当事者・家族の450名の参加があり、依存症における「リカバリー」概念、回復(=リカバリー)施設の意義について多くの人と共有することができたといえます。連続研修会では、様々な立場の関係者や当事者、家族、自助グループと回復施設の役割と課題について検討しました結果を以下にまとめて、ご報告します。

①回復施設の意義

この40年、「アル中」から「アルコール依存症」へ言葉の置き換えによって今見ている問題への理解が変化し、免責効果と治療効果が広がった。しかしこの病気はそんなに単純なものではないという見方が出されるようになり、アメリカから「アルコール依存症は一生治らないでも回復(成長・成熟)はできる」というリカバリーの考えが広がった。回復施設の役割は、回復を就労自立だけでなく、人間の成熟原理に根ざして多面的に社会生活や人間の生活の回復という観点からとらえた支援が必要とされている。また社会的な孤独・孤立をどう克服していくかということを経験施設での集団の場を生かして相互の成熟過程を支え合い、仲間関係を育み、実際に地域で生きる力を引き出していく役割がある。

②生活問題の中に依存症関連問題が広く関係している。生活困窮、生活保護、子どもの支援

等からも地域での介入の必要性がみえてきている。関わろうとしている支援者から、依存症に対する知識と援助技術を獲得していくことが求められている。また、地域の関係者チームのサポートネットワークが求められている。

③依存症の治療にはつながっても、その後に回復施設利用ニーズのある人がなかなか回復施設につながってこない現状がある。今後への課題である。理由は回復施設の存在自体が知られていないことにも起因している。

④自助グループとの連携においては、これまでに連携の積み重ねができてきているものにとらえていると意思疎通に欠けてくる。常日頃からのコミュニケーションが大事でありその仕組みを更に考えていく必要がある。専門治療機関との関係においても常日頃から、その関係性を更新していかなければならない事がわかった。

⑤回復施設の役割は、地域からの相談を受ける、治療につなげる、自助グループにつなげる。回復生活や就労への支援を行う、など多機能となっている。更に又高齢化、重複障害、女性の増加等利用者の多様化もみられ、多機関とのチームによる支援と、回復施設職員の質的向上をはかる研修が必要である

⑥地域の中で啓発を兼ねた様々な就労の機会提供を通して、依存症の人が生き生きと輝く回復の姿が見えるようになってきた点で回復施設における就労支援のとりくみの成果がみえてきた。

⑦回復を支える地域ネットワークづくりを今後各地に広げていくことが求められている。また、そのネットワークの一員として機能する回復施設の広がりが求められている。

